

初期レヴィナスにおける性の記述の問題 ——その規範性と可能性をめぐる——

古怒田 望人

はじめに

本論の目的は、初期レヴィナスの性の記述の規範性と可能性を浮き彫りにし、この規範性と可能性が、レヴィナス現象学全体の性の記述に対する研究を、新たな仕方でも方向づける指針となりうることを示すことにある。

第二次世界大戦中の捕虜収容所時代に主に記された捕囚手帳におけるプルースト読解などの性の記述 (cf. CE1 : 72 また同 : 66) や同時期に構想された小説『エロス』¹の草稿といった近年の資料、またその資料を基にした最新の研究 (cf. ベンスーサン 2014、渡名喜 2021) から、1940年代の初期にあたるエマニュエル・レヴィナスの現象学の主題の一つが、性の記述にあることが明らかとなってきた。事実、「他者」という彼の中心概念が始めて公刊著作で主題化されるのは、「愛撫」という性の経験の記述からだ (cf. EE : 66)。このような初期レヴィナスの性の記述に関して、以下の二点が本論の論点となる。

第一に、初期レヴィナスの性の記述のテキストが、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点を前提とする点である (尚、本論はレヴィナス自身が性差別的であったかどうかではなく、彼のテキストが孕んでしまうこのような規範性を指摘することを意図している)。

第二に、このような規範的観点到根差したレヴィナスのテキストの意図にもかかわらず、初期レヴィナスの性の記述が、この規範性を超過する構造をも含む点である。

この二点を証明するために、本論は次のように展開する。第一節では、初期レヴィナスの「孤独」概念を概観し、この概念に抗してどのように彼が性の記述を導入するのかを論じる。第二節では、『時間と他なるもの』(1948)の性の記述を軸に、1)「女性的なもの」概念の記述の分析から初期レヴィナスの性の記述の観点が問題として取り上げられうること、2)「孤独」の構造に抗して繁殖性概念へと最終的に展開される性の記述が、家父長的な異性愛者男性を主体とした生殖の観点到根差していること、3)初期レヴィナスのテキストがこの観点を普遍化しつつ、この観点から女性やゲイ男性の存在を抹消していることを論じる。最終節では、この規範的観点²を引き受けたとしても、家父長制や異性愛中心主義に限定されない

¹ この小説の草稿は『エロス』あるいは『悲しき豪華』という二つのタイトルが与えられているが、本稿では便宜的に『エロス』と呼ぶ。

² 家父長的な異性愛者男性を主体とした生殖の観点到規範的であることに関しては、次の竹村和子の記述を参照。「正しいセクシュアリティ」とは、終身的な単婚^{モノガミー}を前提として、社会でヘゲモニーを得ている階級を再生産する家庭内のセクシュアリティである。「正しいセクシュアリティ」は「次代再生産」を目標とするがゆえに、男の精子と女の卵子・子宮を必須の条件とする性器中心の生殖セクシュアリティ

多義的な性を記述する可能性を、初期レヴィナスの性の記述が示すことを論じる³。そこでまず、小説『エロス』の草稿における「エロティシズムの食人的世界」概念と『実存から実存者へ』（1947）における「愛撫」概念の分析から、異性愛者間の生殖行為に還元されないペッチングのような口唇的性愛の可能性を論じる。続いて、主に1947年の批評「プルーストにおける他者」の読解から、孤独を乗り越える異性愛者間の家父長的な生殖ではなく、孤独を起点として死した他者と繋がるプルースト的性愛の可能性を論じる。そして結語として、この規範的観点と可能性が、1961年の『全体性と無限』や1974年の『存在の彼方へ』といった、初期以降のレヴィナスの現象学における性の記述の新たな読解の指針となるという本論の成果を示す。

本文に取り掛かる前に、本論がレヴィナス研究としても必要なものであることを論じておきたい。

先行研究では、初期レヴィナスの性の記述の規範性が引き受けられる場合には、その記述の可能性が看過される傾向にある（cf. Beauvoir 1949=1976, Irigaray 1991, Sandford 2000）⁴。他方で、初期レヴィナスの性の記述の可能性が示される場合には、その記述の規範性が周縁化される傾向にある（cf. 村上 2012、中 2015、同 2021、渡名喜 2021）⁵。本論はこの先行研究の偏りを見直す研究となりうる。

また、ジャン＝ポール・サルトル、モーリス・メルロ＝ポンティ、シモーヌ・ド・ボーヴォワールといった現象学者の性の記述が、様々なジェンダーやセクシュアリティの記述に応用されるのに対して⁶、レヴィナスの性の記述のそうした応用がなされていない現状を鑑みたとき、先行研究が示すレヴィナスの性の記述の可能性⁷には限界がある。したがって、

ィを特権化する」（竹村 2002=2021：40）。そのため、この「正しいセクシュアリティ」において「生殖に導く合法的なセクシュアリティが、政治的・経済的・社会的なパートナーシップを保証しているがゆえに、それ以外のエロスの関係は、性愛の有無にかかわらず、パートナーシップとは認められないということになる」（竹村 2002=2021：7）。

³ 捕囚手帳でレヴィナスは愛撫というエロスの経験と性（sexualité）を地続きに記述する（cf. CE1：66：この点に関してはベンスーサン、2014：218をも参照）。この傾向は、1948年の『時間と他なるもの』（cf. TA：88）や『全体性と無限』（1961、cf. TI：309）を経由して晩年まで見られ、1982年にも、『時間と他なるもの』と『全体性と無限』のエロスが回顧されつつ、エロスと性が連続的に議論されている（cf. EN：131-132）。それゆえ、本論では初期レヴィナスにおけるエロスと性に特別な区分を設けずに扱う。ただし、後期においては、「エロスなき愛」（EN：121）が語られる一方で、性は「愛撫」の文脈で依然として肯定的に記述されており（cf. AE：19）、エロスと性の間にある面で差異が設けられる。この後期レヴィナスの差異に関しては、本論の結語で示す後期レヴィナスの性の記述の展望から読み込むことで別稿にて論じたい。

⁴ 例えば、ステラ・サンドフォードはレヴィナスの性の記述を初期から後期まで横断的に批判しつつ、「女性的なもの」概念を含めたレヴィナスの記述は「フェミニストの理論的企図とは根本的に相いれないものである」（Sandford 2000：140）と断定的に結論付けている。

⁵ 例えば、初期から中期の「女性的なもの」概念が緩和ケアの語りの分析に应用可能であることを論じる村上靖彦（cf. 村上 2012：60-68）は、その概念がジェンダーの観点において問題含みであることを指摘しながらも（cf. 村上 2012：191）、その問題を直には引き受けていない。

⁶ メルロ＝ポンティに関してはサラモン 2019 を、サルトルに関しては Rubin 1998 を、ボーヴォワールに関しては藤高 2019 を参照。

⁷ 「女性的なもの」概念や繁殖性概念のフェミニズムへの应用可能性を論じているダイアン・パーピックやリサ・グンサーの研究を参照（cf. Perpich 2001、Guenther 2006）。

家父長制や異性愛中心主義に限定されない多義的な性を初期レヴィナスから引き出す本論の試みは、レヴィナス研究を様々なジェンダーやセクシュアリティに開かれたものにする。

1. 初期レヴィナスの性の記述の背景——孤独の問題

本節では、初期レヴィナスがそれに抗して性の記述を展開する、主体に関わる存在論的な「孤独」の問題を論じる⁸。それにより、1) 初期レヴィナスが性の記述を展開する筋道を明確にしつつ、次節でその筋道の批判的検討を行い、2) 第三節では、初期レヴィナスにおけるプルースト的性愛の可能性の孤独の構造とこの孤独の問題との対照を行う。

そこでまず、公刊著作で初めて性が主題的に言及される、1947年の『実存から実存者へ』の記述をみたい。

エロスにおいて超越は根本的な仕方で考えられうる。エロスにおいて超越は存在にとらえられ避けがたく自己へと回帰してゆく自我に、その回帰とは別のものをもたらし、自我をその影から解放することができる。(EE : 164)

「避けがたく自己へと回帰してゆく自我」の「解放」、つまり主体の何らかの自閉的な構造に抗して「エロス」という性の水準が導入されている。

続いて、この自閉的な構造が「孤独」と見なされることを、1948年の『時間と他なるもの』の記述から確認したい。性の記述が軸となるこの著作の冒頭でレヴィナスは、「孤独」を「存在論的範疇」として明らかにすることを自身の課題の一つとして掲げている (cf. TA : 18)。

私たちは存在者や事物に取り囲まれており、それらと何らかの関係を結んでいる。視覚によって、触覚によって、共感によって、共同作業によって、私たちは他者と共にある。これらの関係性は他動詞的なものだ。[……] しかし、私は他者であるのではない。私は完全に孤独である。したがって、私に根差した存在、私が実存するという事実、私の実存することは、絶対的に自動詞的な要素を、志向性なき、関連なき何ものかを構成している。人々の間ではすべてが交換可能だが、実存することだけは別だ。その意味では、存在すること、それは実存することによって孤立することである。(TA : 21、強調は原典)

レヴィナスは「私が実存するという事実」の交換不可能性から、「私は完全に孤独である」

⁸ この孤独の問題の包括的な分析として渡名喜,2021 : 199-230 を参照。

という構造を引き出している。彼が記述する「孤独」とは、唯一の存在であるといった実存の構造ではなく、「私が実存するという事実」が他者によって交換不可能である（代替できない）という排他的な（＝自閉的な）存在論的構造を記述する概念だといえる⁹。

したがって、初期レヴィナスの性の記述は、この主体の排他的な存在論的構造としての「孤独」に抗する仕方で導入されるのだ。事実、『実存から実存者へ』においてレヴィナスは、「自己自身へと不可避的に回帰しない可能性」を「繁殖的＝生殖的 (fécond) である可能性」、「息子を有する可能性」とみなす (EE : 165)。すなわち、「孤独」の自閉的構造に抗して「息子の生殖」という性の水準が提示されるのだ。

次節では、孤独の問題に抗して「息子の生殖」に至るこの初期レヴィナス性の記述が、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点からなされることを明らかにしたい。

2. 初期レヴィナスの性の記述の規範性——生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点

本節では、1948年の『時間と他なるもの』の性の記述を中心とした分析によって、孤独の問題に抗して繁殖性概念へと最終的に展開される初期レヴィナスの性の記述に根差す観点を、批判的に顕在化させる。この作業から、この観点が家父長的な異性愛者男性を主体とした生殖の観点到収斂し、様々なジェンダーやセクシュアリティを抹消していることが浮き彫りになるだろう。そこでまず、初期レヴィナスの性の記述の観点が、問題として取り上げられうることを示す。

『時間と他なるもの』の「エロス」と題された節において、レヴィナスは性的差異を起点に性を記述する (cf. TA : 77-78)。性的差異とは彼にとって、それに先立って存在する一つの全体を前提とするような「相補的な二項の二元性」とは異なった、「諸存在の乗り越え不可能な二元性」(TA : 78) を意味する。同時に、この性的差異をレヴィナスは、「愛撫」という身体的対人関係から具体化している (cf. TA : 82-83)。

このような性的差異の記述は、何らかの全体から性をカテゴリー付けする観点 (例えば、性的差異を予め異性の「男/女」の対から区分する観点) を拒み、身体経験から記述し直す中立的なものに見える。しかし、このような性的差異の記述は、「それ自体が恥じらいを介して定義された神秘としての他者の他者性」(TA : 80) といった他者のカテゴリーに「女性的なもの (le féminin)」を一方的に帰属させることで成り立っている。愛撫の記述も、「他なる何かとの投企や計画を欠いた絶対的な戯れ」(TA : 82) という、「女性的なもの」を他者と特徴づける記述のために援用されている。ボーヴォワールが『第二の性』(1949) で一早く批判したように (cf. Beauvoir 1949=1976 : 17-18)、初期レヴィナスの性の記述は、女性を一方的に他者とみなすものである。

⁹ この「孤独」の記述に関しては、先に参照した渡名喜 2021 (特に同 : 202-210) の詳細な分析を参考としている。

確かに、レヴィナスが「女性的なもの」を「光から逃れることを本義とした存在様相」(TA: 79)や「他者性という出来事」(TA: 80)と記述していることから、「女性的なもの」の記述は経験的ないし象徴的な女性を記述しているのではなく、何らかの現象の構造を記述しているといえるかもしれない。実際、先行研究において「女性的なもの」概念は、「言葉と行為能力と(の)手前の水準の人間存在のありかた」(村上2012: 60、カッコ内は引用者)や「存在論的な事態」(中2015: 56)といった、女性という性(別)とは切り離された現象の構造と解釈されている。

しかし、「女性的なもの」を他者として記述するこの仕方は、捕囚手帳における構想段階から『時間と他なるもの』に至るまで、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』におけるアルベルチヌスやレオン・ブロワの『婚約者への手紙』における女性観といった、女性を社会文化的に表象する観点を参照している(cf. CE1: 72、同: 151-160、TA: 79)。アルベルチヌスとの関係が「把持不可能なものとの戦い」(CE1: 72)と記述され、レヴィナスが捕囚手帳に書き写している『婚約者への手紙』の一節では女性が「恥じらい」から特徴づけられており(cf. CE1: 157)、「ある種の自由を把持しようと試みる運動の挫折」(TA: 81)や「恥じらい」(TA: 80)から特徴づけられる「女性的なもの」概念と、レヴィナスのプルースト、ブロワ読解は連続している。したがって、彼がこれらの読解を通して「女性的なもの」概念を構想したことは明かである。

以上の点から、「女性的なもの」概念を性の文脈から切り離して解釈することは困難であり、レヴィナスの「女性的なもの」の記述には、性に関する特定の観点が含まれていると言わざるを得ない。

この観点が、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点であることを示すために、論点を「繁殖性(fécondité)」の記述に移したい。『時間と他なるもの』において「女性的なもの」概念が論じられる「エロス」に、「息子」概念が論じられる「繁殖性」と題された節が続くのだが、このような記述の筋道から、前節で見た「孤独」という主体の存在論的構造に抗する性の水準を、レヴィナスが「女性的なもの」概念を経由した繁殖性概念のうちに見出していることが分かる。実際レヴィナスは、「自己への自我の繫縛から出発して」、「自己から自我の解放」に向かう主体の排他的な存在論的構造の変容を、「女性的なもの」概念から進めて、息子概念に行き着く」展開において捉えている(cf. TA: 87)。それゆえ、初期レヴィナスの性の記述の観点の解明のためにも、繁殖性概念の分析が求められる。

『時間と他なるもの』における繁殖性の記述は、次のような問いから導入される。「どのように私は[……]自己へとどうしようもなく回帰する私であることなく、君のなかで私でありつづけうるのか。[……]そのようなことが可能となる方法の一つしかない。父性によってである」(TA: 85)。「自己へとどうしようもなく回帰する私」、すなわち「孤独」という主体の排他的な存在論的構造の唯一の転換点(「方法の一つしかない」として父性が記述される。

なぜ、父性なのだろうか。それは、レヴィナスにとって父性は、「私が実存するという事

実」を「孤独」として一義的に自閉させることなく、息子との、繁殖＝生殖という次元での連続しつつ差異を孕んだ構造から多元化するからである。父性は「他者でありながらも、私であるような未知の者との関係」(TA:85)、あるいは「息子に対する父の外部性、多元論的な実存すること」(TA:87)なのだ。父性が「孤独」の変容として捉えられるのは、生殖の水準で結び合う限りで父と息子の存在が分かちがたい(「他者でありながらも、私であるような未知の者」)が、他方で息子は対人関係を結びうる他者でもある(「息子に対する父の外部性」という繁殖性の構造において、「孤独な」主体の存在論的構造の一元性が多元的に変容するとレヴィナスがみなすからだ。

実際、先行研究において初期レヴィナスの繁殖性概念は、「従来の西洋哲学のうちで考えられてきた存在者の多数性とは異なる、存在することの多元性」(中 2015:63、強調は原典)や「「実存すること」を、一元的ではなく多元的に理解すること」(渡名喜 2021:230)というある種の存在論と解釈されている。

しかし、ここで「女性的なもの」の存在が抹消させられている。この抹消とそれを生じさせている観点を把握するために、『時間と他なるもの』の翌年に行われた講演「発話と沈黙」における記述に目を移したい。そこでレヴィナスは、主体の存在論的構造である「孤独」を、「ひと(=男性 *homme*) が独りであるのは良くない」という『創世記』2章18節における聖句から言い換えている(cf. CE2:97)。そして、このような孤独は「女性的なものの出現によって解決」と言われる(ibid.)。なぜなら、「男性(=ひと *homme*) は女性的なものの中に自分自身の実体を認めるから」である(ibid.)。このようなレヴィナスの記述から、「女性的なもの」との関係が、アダムとイヴを原型とする夫婦関係から引き出されていることが分かる。同時に、この夫婦関係から男性が女性のうちに見出すとされる「自分自身の実体」は「息子」(カインとアベル)だと推察できる。というのも、一方で1950年の講演「教え」において、エロス、父性、そして息子から「兄弟関係」に連なる記述がなされ(cf. CE2:190-198)、他方で1959年の講演「可能事の彼方」では、『時間と他なるもの』が回顧されつつ、「エロティックなもの」と「父性」は「家族という人間的驚異において調和する」と述べられるからだ(CE2:311)。このように、繁殖性へ至る「女性的なもの」との関係は、^{ヘテロ}異性愛者¹⁰の夫婦間の生殖に限定された家父長的な性の観点から引き出されている。

したがって、初期レヴィナスの性の記述の筋道は、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点を介して可能となっている。そこで彼は、父性だけが孤独という主体の存在論的構造の唯一の転換点であると記述することで、このような規範的観点があたかも一般的に適応可能な観点であるかのように普遍化している(「そのようなことが可能となる方法は一つしかない。父性によってである」)。同時に、他者性も、「女性的なもの」から、娘や子どもではなく、「息子(の生殖)」へと置き換えられている。他者として記述される「女性的なもの」は、繁殖性に帰結する初期レヴィナスの性の記述の展開において、父ないしは

¹⁰ 厳密にはシスヘテロだが、本論ではヘテロに論点を絞る。

息子という異性愛者男性を主体とした生殖に至るための「通過される条件」として最終的に扱われることになる。つまり、「女性的なもの」は他者として記述されるだけではなく、最終的にその存在を記述の展開から抹消させられているのだ。

ここで、繁殖性が「生物学的範疇」であるだけではなく、「心理学的な意義」をも有するとされている点から (cf. TA : 87)、繁殖性概念は生殖の構造に限定されないとの反論がありうる。事実、先行研究では繁殖性概念はある種の存在論と解釈されていた。

しかし、ティナ・チャンターが指摘するように、「もし父性、父、息子に特定の優先順位が付与されていることに何も意味がないとしたら、なぜこれらの概念は中立的な術語ではなく、性的な術語によって表されているのだろうか」(Chanter 2001 : 16)。つまり、このような繁殖性概念を存在論と解釈する態度では、レヴィナスがなぜこれらの概念を性的に記述したのかという点に答えることができない。そして、初期レヴィナスの性の記述の展開において、生殖のために異性の男女が身体的に関わるインサーションのような生殖行為の構造を除外することは困難である。というのも、異性愛者の夫婦関係を前提とし、その男女の愛撫という身体的対人関係を介在させたうえで導き出される息子の生殖の記述において、性交渉を除いた生殖は想定されていないからだ。

さらに、このような規範的観点に、ゲイ男性を排斥するレヴィナスの記述が伴っている。彼は、『時間と他なるもの』の約二年前にあたる1945年頃に書かれた捕囚手帳の中で、「男色家 (pédéraste)」を「落ち目」と呼び、その理由を「取り返しのつかない遺伝的欠陥を課されている」からであり、「彼らは病人に過ぎない」と断定している (CE1 : 161)。このように、初期レヴィナスの性の記述のテキストには、ゲイ男性を排他的に蔑視する同性愛嫌悪を孕んだ異性愛者男性の観点が存在する。

このような同性愛者の周縁化（「落ち目」と病理化（「遺伝的欠陥」、「病人」）の記述は個人的な問題ではなく、当時のレヴィナスの状況も含めた社会、政治的な問題である。このような記述は、ジョージ・L・モッセが指摘するような、ナチスドイツによる同性愛者への性に基づいた迫害と暴力を正当化するためのロジックであると同時に、ナチスドイツというナショナリズムを異性愛者男性の性から維持するロジックでもあった (cf. モッセ 1988=1996 : 167-239)。「自然そのものが異性愛とゲルマン民族を支えているという想定のもとで、同性愛者とユダヤ人は不自然なものとして排除されねばならなかった」(モッセ 1988=1996 : 238。尚、本論は、冒頭でも指摘したように、レヴィナス自身がこうした性差別の問題に加担していたかどうかではなく、彼の記述するテキストが孕みうるこうした規範性を指摘することを意図している)。

レヴィナスが同性愛嫌悪を孕んだ記述をしたという事実と、彼が家父長的で、異性愛中心主義的な観点から生殖を記述することは、無関係であるようにも見えるかもしれない。しかし、2018年の杉田水脈衆議院議員によるLGBTを「彼ら彼女らは子供を作らない、つまり「生産性」がない」とみなす発言 (杉田 2018, 58-59) や2021年の築和生衆議院議員による

LGBTは「生物学上の種の保存に反する」との旨の発言¹¹が示すように、レヴィナスの生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点（家父長的な異性愛者の観点から生殖〔生産性、種の保存〕を特権化すること）と、彼の同性愛嫌悪の記述（「落ち目」や「生産性」がない、「種の保存に反する」とセクシュアルマイノリティを蔑視すること）は社会、政治的な言説の水準で現在も切り離しがたいものである。

初期レヴィナスの性の記述のテキストは、性を家父長的な異性愛者男性を主体とした生殖に限定的に結び付けつつその観点を普遍化し、そのような生殖に関わらないジェンダーやセクシュアリティ、例えば女性やゲイ男性を抹消する社会、政治的な問題を孕んだ記述を展開している。

3. 初期レヴィナスの性の記述の可能性——口唇的性愛とプルースト的性愛

しかし、このような規範的観点に、初期レヴィナスの性の記述は汲み尽くされない射程を持つ。本節では、初期レヴィナスの性の記述が、規範的観点に根差したそのテキストの意図に反して、記述の構造として規範的観点を超過する可能性を示したい。その超過の可能性として、初期レヴィナスが記述する、口唇的性愛とプルースト的性愛、この二点を分析する。それにより、初期レヴィナスの性の記述が、生殖や家父長制、異性愛中心主義に還元されない多義的な性を記述する可能性を含むことがみえてくる。

(1) 口唇的性愛

まず、小説『エロス』の草稿で提示される、「エロティシズムの食人的世界」という概念を取り上げたい（cf. CE3 : 51）。この概念の分析から、初期レヴィナスの口唇的性愛の記述が、異性愛者間の生殖行為に還元されない多義的な性を含意したものであることが分かるだろう。

議論の前提として、この「エロティシズムの食人的世界」の記述が、初期レヴィナスの規範性のある面で反復していることを確認する必要がある。というのも、「エロティシズムの食人的世界」は、「若い娘が長い髪をとかしている姿」に男性たちが性的に見とれる女性の客体化された状況、明らかに異性愛者男性の観点が反映された状況から導入されるからだ（cf. CE3 : 50）。この概念は、生殖を特権化する観点からは外れるが、女性を他者化する初期レヴィナスの家父長的で、異性愛中心主義的な観点から提示されているといえる。しかし、「エロティシズムの食人的世界」の記述の構造それ自体は、その規範的観点を超過する。この超過を示すために、「エロティシズムの食人的世界」と対比される構造からみてゆきたい。

「エロティシズムの食人的世界」は、「釘を打ちこむためのハンマー」のような「有用なもの」からなる、「道具の合目的性」の世界と対照させられている（CE3 : 50 - 51）。さらに、

¹¹<https://www.nhk.or.jp/politics/articles/statement/61052.html>（最終確認日：2022年6月17日）。

このような「～ために」という道具連関からなる有用性の観点を、レヴィナスは、「人間の解剖学的構造」における「生物学的な合目的性」という身体の構造にも広げる(CE3:51)。この構造は、「そこで足が走ることに役立ち、筋肉が肉体的努力に役に立つスポーツ」から例示されており(ibid.)、身体を「役立つ＝～ために」という有用性に基づけるものである。レヴィナスは、道具から解剖学、生物学的身体に至る合目的性を論じることで、それらの「～ために」という有用性に基づけられた構造を浮き彫りにさせている。

対して、「エロティシズムの食人的世界」においては、このような有用性に基づけられた構造が、「重量感のある塊の曖昧さ——エレメンタルな(élémental)皮膚の曖昧さ——のなかで食べるべきものようになる」と記される(CE3:51)。なぜレヴィナスは、「食べるべきものようになる」と記述される口唇的性愛を、「エレメンタルな皮膚の曖昧さ」という身体の構造から捉えようとするのか。ここで解釈の手がかりとなるのは、この身体の構造と対比されていたものが、「～ために」という有用性に、身体を解剖学、生物学的に基づける構造であったことだ。この点からレヴィナスは、口唇的性愛の水準において、解剖学、生物学的な有用性から切り離され、「皮膚」のような多義的な構造から限定付けられなくなる身体性(「エレメンタルな皮膚の曖昧さ」)を記述していると推察できる。

そして、このような記述の構造は、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点を超過している。ジークムント・フロイトが『性理論についての三篇』(1905)の中で指摘するように、口唇的性愛は、「生殖器」という「性的結合のために決められている身体領域から解剖学上はみ出してしまふ」(Freud 1905=2007:53、強調は原典)ものであり、その性的触発の領域は、「口のとどく任意の場所の皮膚」(Freud 1905=2007:82、強調は引用者)あるいは「あらゆる身体部位および内臓の諸器官」(Freud 1905=2007:86)にまで拡張される。加えて、このような口唇的性愛は、「おしゃぶり」のように、性器に性が限定される以前から生じている(cf. Freud 1905=2007:98-100)。したがって、異性愛者間の生殖行為に還元されないペッティングやアナルセックスのような多義的な性を、口唇的性愛は含意している¹²。以上の点から分かるように、解剖学的、生物学的な有用性から切り離され、「エレメンタルな皮膚の曖昧さ」に拡張される「エロティシズムの食人的世界」の記述は、生殖のために生殖器という解剖学的、生物学的な水準に身体を限定する生殖の構造、言い換えれば「女性的なもの」から繁殖性に至る初期レヴィナスの性の記述の筋道が前提とするインサクションのような生殖行為から、記述の構造上逸脱しているのだ。

このような口唇的性愛の可能性は、初期レヴィナスにおいて断続的に提示されている。この点を、『エロス』と同時期に構想された『実存から実存者へ』における以下の愛撫の記述から示したい。

愛は、根本的で、消し去ることのできない飢えによって特徴付けられる。[……]

¹² 自明のことであるが、ペッティングやアナルセックスは異性愛者であろうと、同性愛者であろうと、それらとは別の性指向を持つ者であろうと生きられうる。

愛される存在に直面して抱く困惑は、経済的な用語で所有といわれる事態に先立っているだけではなく、所有そのもののうちでも再発見される。愛撫の混乱のうちには、アクセスが不可能なこと、暴力が挫折していること、所有が拒まれてあることの告白がある。そしてまたキスや噛みつきのうちには、「食べること」の模擬行為という悲劇的な滑稽さがある。(EE : 66)

この愛撫の記述は、『実存から実存者へ』の「世界」と題された章で「世界を超えた」水準として提示されている (cf. EE : 66)。それゆえ、レヴィナスが愛撫の構造と対比する世界の構造を、まずは素描する必要がある。

『実存から実存者へ』においてレヴィナスは、世界との関りを、「生きるために食べる」ことではなく、「お腹が空くから食べる」といった「含むところのない率直な意欲」や「真摯さ」という「欲望」と記述する (cf. EE : 56-57)。このような彼の記述には、マルティン・ハイデガーの『存在と時間』(1927)における「～ために」という存在への気遣いへと連なる世界内存在の道具連関の構造を、「存在論的合目的性」として批判し、別の観点から世界との関りを提示しようとする意図がある (cf. EE : 64-65)。「お腹が空くから食べる」ように、「欲望をそそるもの」それ自体が欲望を満たす「目的」であり、その「終わり」である (cf. EE : 56) という意味で、「～ために」という合目的性に根差す世界とは異なった、「糧」(EE : 65) としての世界との関りが狙われている。

対して、「困惑」や「混乱」と特徴づけられていたように、愛撫は、欲望の糧となる世界との関りが阻まれ、愛の「根本的で、消し去ることのできない飢え」という満たされない欲望が生じる経験だといえる。

このような愛撫の記述の構造は、『時間と他なるもの』において「女性的なもの」を狙う愛撫の記述から逸脱している。というのも、「女性的なもの」に関わる愛撫が「食べること」という口唇的経験から峻別される (cf. TA : 82) のに対して、「エロティシズムの食人的世界」と同じく、上記の愛撫の記述は「キス」や「噛みつき」という口唇的性愛、「食べること」の模擬行為」として記述されるからだ。そして、「～ために」という有用性とは異なった構造を、口唇的性愛から捉えようとする記述の枠組みという点で、上記の愛撫の記述と「エロティシズムの食人的世界」の記述は連続している。したがって、口唇的性愛の可能性は、初期レヴィナスにおいて断続的に見出されるものなのだ。

ただし、このような可能性は、初期レヴィナスのテクストの意図に反して、彼の記述が含むものであることを強調しなければならない。事実、『実存から実存者へ』の翌年の『時間と他なるもの』において、愛撫を介した官能は、「食べること」の水準から切り離されつつ、「女性的なものの役割と例外的な位置」に関する彼の見解を確証させるものとみなされ (cf. TA : 82)、この愛撫が向かう「未来の地平」は繁殖性に置かれることになる (cf. TA : 82-84)。愛撫の記述は、「女性的なもの」概念並びに繁殖性概念の観点から、規範的に組み替えられるのだ。そして、このような記述は、1961年の『全体性と無限』においても、「女性的なも

の」との愛撫を介した官能における「子どもを欲すること」という「未来の無」といった仕方で引き継がれている (cf. TI : 298-299)。

(2) プルースト的性愛

この口唇的性愛に加えて、初期レヴィナスの性の記述の超過の可能性は、彼のプルースト論においてもみられる。前節で見たように、初期レヴィナスのプルースト読解は「女性的なもの」概念の下地となっており、その点で彼の規範的観点を基づけている。しかし、初期レヴィナスのプルースト読解の構造は、家父長的な異性愛者男性を主体とした生殖とは異なった仕方で他者と性的に繋がる仕方を提示している。

そこでまず、1947年の批評「プルーストにおける他者」における以下の一節を分析したい。

アルベルチヌの無が彼女の全面的他者性をあらわにするのだ。自己の孤立した死にこだわる現代哲学に反して、死、それは他者の死である。他者の死だけが、失われた時を求めての探求の交差点に位置している。[……] まさにこの他者の死こそが愛を培うものなのだ。存在論的に純粋なものとして見た場合、エロスは[……] 拒否しつつも自らを与えるものとの、他者である限りでの他者との直接的関係、神秘との直接的関係に由来するのである。(NP : 122)

一方で、レヴィナスは、アルベルチヌとの性愛関係を、「神秘」といった「女性的なもの」概念を記述していた術語から言い表している。しかし他方で、ここでアルベルチヌとの性愛関係は「他者の死」、つまり死したアルベルチヌとの性愛関係であり、「女性的なもの」から繁殖性へと至る記述の展開——「息子の生殖」へ向かう展開——とは真逆の仕方で方向づけられている。初期レヴィナスのプルースト読解は、アルベルチヌとの異性愛の形をとっているが、自らの生殖を特権化する家父長的な観点から逸脱する構造を内包するといえる。

そして、このような「他者の死」と結びつくプルースト的性愛は、自己の攪乱を生じさせる。捕囚手帳において、「消え去り、死した」アルベルチヌとの「繋がり」は主人公の「苦痛」によって成り立っていると記述され (cf. CE1 : 145)、「プルーストにおける他者」においては、このようなプルースト的苦痛において重要なことは、「自我が(苦痛のような)内面的出来事をつかみながらも、あたかも他者のうちで内面的出来事と出会うかのように、その内面的出来事によって自己が攪乱される仕方」だと語られる (NP:121、カッコ内は引用者)。このように、「他者の死」と繋がるプルースト的性愛の記述は、その他者を「女性的なもの」概念から他者化するのではなく、その苦痛を介した繋がりによって自己が攪乱される触発についての記述なのだ。したがって、初期レヴィナスのプルースト読解は、生殖を介して父から息子、兄弟へと家父長的な主体を保ってゆくのではなく、その主体の自己を揺るがすよ

うな苦痛を介した性というある種のマゾヒズム的な経験の構造を示している。

加えて、プルースト的性愛においては、繁殖性によって主体の「孤独」が乗り越えられるのとは対照的に、アルベルチヌを喪失した主体（主人公）の「孤独」に、死したアルベルチヌとの繋がりが見出される。プルースト的性愛の文脈では、孤独の構造は、問題として退けられるのではなく、性愛関係の核として引き受けられるのだ。

〔死したアルベルチヌの不在という〕この点で、プルーストにおける孤独というテーマはある新たな意味を獲得する。孤独という出来事の本義は、それがコミュニケーションへと反転するという点にあるのだ。(NP : 123、カッコ内は引用者)

苦痛によって自己が攪乱されつつ、その苦痛の孤独を起点として死した他者と繋がるマゾヒズム的な性愛の可能性が、レヴィナスの記述するプルースト的性愛なのだ。実際、『失われた時を求めて』において、アルベルチヌの死後に見出される彼女との繋がりは孤独な苦痛を介してである。アルベルチヌの死の知らせを聞いた後、主人公は以下のように語る。

アルベルチヌが私に与えた苦しみは、彼女と私の間の最後の繋がりであり、思い出よりもさらに長く生き延びた。というのも、あらゆる身体的なものがもっているエネルギーの保存によって、苦痛は記憶の与える教訓さえ必要としていないからだ。たとえば、月光を浴びて森で過ごした美しい夜の数々を忘れてしまった人も、そこで雇ったリューマチには依然として苦しみ続けるように。(Proust 1992 : 108)

孤独な苦痛を介したアルベルチヌとのマゾヒズム的な繋がりは、彼女が死し、忘却されてもなお、主人公と彼女が繋がる最後の契機となるのだ。

しかし、捕囚手帳から 1947 年の批評までに構想されたこのプルースト的性愛の可能性も、初期レヴィナスの性の記述のテキスト上で、その存在を否認されることになる。というのも、1948 年の『時間と他なるもの』において繁殖性は、「未来の地平」という「死に対する勝利」(TA : 84)、あるいは「死に打ち克つこと」(TA : 73) としても論じられているからだ。確かに、ここで主題となっている「死」は、主体に訪れるような「死」である (cf. TA : 55-61)。しかし、生殖を介した未来を「死に対する勝利」のような仕方で表象することで、レヴィナスはプルースト的な「他者の死」のような「死」の経験を性の水準で不可視化させている。そして、このような「死に対する勝利」としての繁殖性の記述は、『全体性と無限』まで続いてゆく (cf. TI : 49-50)。この意味でプルースト的性愛の可能性もまた、初期レヴィナスのテキストの意図に反して浮き彫りになるものなのだ。

おわりにかえて

まとめよう。初期レヴィナスの性の記述のテキストは、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点に基づいており、この観点を普遍化している。この観点は、家父長的な異性愛者男性を主体とした生殖を軸としないジェンダーやセクシュアリティを抹消させていた。そしてこの抹消の問題は、当時のレヴィナスが置かれていた状況も含めた、現代にも残る社会、政治的な問題である。他面で、初期レヴィナスの性の記述は、自らのテキストの意図に反して、そのような規範的観点を超過してしまう性の記述の構造をも内包していた。初期レヴィナスの性の記述は、その規範的観点を引き受けたとしても、家父長制や異性愛中心主義に限定されない多義的な性を記述する可能性をもつ。

このような可能性の一つであった口唇的性愛の記述は、エロスにおける「他者を享受する可能性」(TI: 285)という『全体性と無限』の主張へと展開されていると考えられる。なぜなら、世界を糧として食べ享受する水準(cf. TI: 133-137)と他者を性的に享受する水準とのこのような交錯は、「エロティシズムの食人的世界」における「エレメンタルな皮膚」といった、初期レヴィナスの口唇的性愛の記述にその着想を見出せるからだ(『全体性と無限』において享受される糧は「エレメント」と記述される[cf. TI: 127-151])。そして『存在の彼方へ』(1974)では、性の水準が愛撫を介した「皮膚」に置かれつつ(cf. AE: 19)、このような愛撫の経験として「キス」の記述がなされており(cf. AE: 121)、口唇的性愛の記述はレヴィナスの中で展開し続けていたといえる。

また、初期レヴィナスにおけるプルースト的性愛も、『存在の彼方へ』を中心に提示される、後期レヴィナスの「老化」における対人関係として展開されることになる(プルーストにおける老化と性は、1940年代からレヴィナスが注目していた主題である[cf. OE1: 72-73])。筆者が別稿にて論じたように、プルースト的性愛は、『失われた時を求めて』の主人公が老い衰えた身体において経験するマゾヒズム的な性愛関係として、後期レヴィナスにおいて立ち現れてくる(そこで、アルベルチヌを失い「孤独」になったことで逆説的に生じる、彼女との繋がりが記述される cf. 古怒田 2018)。

これらの初期レヴィナスにおける可能性は、先行研究が論じる「女性的なもの」概念や繁殖性概念に留まらないものであり、レヴィナスの性の記述を新たな仕方で解釈しうるものである。また、エヴァ・ジアレクは、後期レヴィナスの身体経験と倫理を交錯させる記述がフェミニズムにおいて有効であると論じつつも、彼がそうした記述を性の水準から切り離す点を批判しているが(cf. Ziarek 2001)、本論が提示したこれらの可能性の射程に基づくなら、むしろ後期レヴィナスの記述は、性の水準で具体的に解釈可能である。

しかし、このようなレヴィナスの性の記述の可能性は、その記述の規範性の分析と共に精査されなければならない。というのも、1) 先に見たようにこれらの可能性は『全体性と無限』に至るまである面で隠蔽され、2) そこで息子に限定された「子どもの未来」が「愛された女性」の可能性、並びに父としての「私の未来」として提示されることで(cf. TI: 299-300)、生殖を特権化する家父長的で、異性愛中心主義的な観点は、時間性に基づいてより明確に提示されることになるからだ。初期レヴィナスの性の記述の規範性の問題が、現在も続

く社会、政治的な問題であった以上、このようなレヴィナスの性の記述の規範性を初期以降も引き受けたうえで、その記述の可能性を模索しなければならない。

以上のように、本論が見出した初期レヴィナスの性の記述の規範性と可能性は、レヴィナス現象学全体におけるその性の記述を見通し、新たな仕方で方向づける読解の指針として働きうる。この指針が本論の成果の一つである。このような初期以降の彼の性の記述への指針を提示することで、本論を綴りたい。

謝辞

本稿執筆にあたって貴重なご助言をくださった赤阪辰太郎さん、藤高和輝さんに深く感謝申し上げます。

略号

Levinas, Emmanuel

EE : 1947=1990, *De l'existence à l'existant*, Vrin.

TA : 1948=1983, *Le temps et l'autre*, Puf.

TI : 1961, *Totalité et infini*, LGF, «Le Livre de poche».

AE : 1974=2001, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, «Le Livre de poche».

NP : 1976, *Noms Propres*, Fata Morgana.

EN : 1991, *Entre nous*, Éditions Grasset&Fasquelle.

CE1: 2009, *Œuvres*, t.1, *Carnets de captivité suivis de Écrits sur la captivité et Note philosophiques diverses*, Grasset-IMEC.

CE2: 2011, *Œuvres*, t.2, *Parole et silence et autre conférences inédites au Collège philosophique*, Grasset-IMEC.

CE3: 2013, *Œuvres*, t.3, *Eros, littérature et philosophie*, Grasset-IMEC.

文献

Beauvoir, Simone de, 1949=1976, *Le deuxième sexe*, t.1. Gallimard.

ベンスーサン, ジェラルド, 2014, 「両義性と二元性: レヴィナスにおけるエロスのなものについて」、合田正人編『顔とその彼方』知泉書館、213-232.

Chanter, Tina, 2001, "Introduction" in Chanter, Tina. (ed.) *Feminist Interpretations of Emmanuel Levinas*. The Pennsylvania State University Press, 1-27.

Freud, Sigmund, 1905=2007, *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. Fischer Taschenbuch Verlag.

藤高和輝, 2019, 「曖昧なジェンダー」の承認に向けて: ポーヴォワール『第二の性』におけるジェンダーの「両義性=曖昧性」(日仏女性資料センター編『女性空間』36号, 81-92) .

- Guenther, Lisa, 2006, *The Gift of the Other*. State University of New York Press.
- Irigaray, Luce, 1991, “Questions to Emmanuel Levinas : On the Divinity of Love” translated by Margaret Whitford
in Bernasconi, Robert and Critchley, Simon(ed.) *Re- Reading Levinas*, Indiana University Press, 109-118.
- 古怒田望人、2018、「老化の対人関係：レヴィナスにおけるプルーストから」、日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』第23号、163-173.
- モッセ、ジョージL、佐藤卓己・佐藤八寿子訳、1988=1996、『ナショナリズムとセクシュアリティ』柏書房.
- 村上靖彦、2012、『レヴィナス』河出書房新社.
- 中真生、2015、「レヴィナスにおける女性的なもの：性差と主体の二元性」、京都ユダヤ思想学会編『京都ユダヤ思想』第4号、53-86.
- 中真生、2021、『生殖する人間の哲学』勁草書房.
- Perpich, Diane, 2001, “From the Caress to the Word : Transcendence and the Feminine in the Philosophy of Emmanuel Levinas” in id. *Feminist Interpretations of Emmanuel Levinas*, 28-52.
- Proust, Marcel, 1992, *Albertine disparue*, Folio Classique.
- Rubin, Henry S, 1998, “Phenomenology as Method in Trans Studies” in *GLQ : A Journal of Lesbian and Gay Studies* 4:2, Duke University Press, 263-281.
- Sandford, Stella, 2000, *The Metaphysics of Love*. The Athlone Press.
- サラモン、ゲイル、2019、藤高和輝訳、『身体を引き受ける』以文社.
- 杉田水脈、2018、「「LGBT」支援の度が過ぎる」、新潮社編『新潮45』第37巻第8号、57-60.
- 竹村和子、2002=2021『愛について』岩波現代文庫.
- 渡名喜庸哲、2021、『レヴィナスの企て』勁草書房.
- Ziarek, Plonowska Ewa, 2001, “The Ethical Passions of Emmanuel Levinas” in id. *Feminist Interpretations of Emmanuel Levinas*, 78-95.

(こぬた あさひ・大阪大学人間科学研究科)